

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

ボクのメイドは 同級生

My maid is a classmate.

小説 神楽陽子

挿絵 犬洞あん



第一話

ティータイムゝボクのメイドは紅茶味

006

第二話

内緒の体育ゝボクのメイドと食い込みレッスン

066

第三話

お仕置きタイムゝボクのメイドはアナルマゾ

125

第四話

バスタイムゝボクのメイドとスクール水着

171

エピローグ

エステープゝ誰にも内緒の女子トイレ

233

登場人物紹介

Characters



えんどう もえぎ
遠藤 萌葱

私立K中央学院一年三組のクラス委員長。皆に頼られるまともな少女。しかし、実は同級生の少年、七一誠と同居しており、屋敷では彼に誠心誠意奉仕する、メイドの顔を持つ。

ななかず いっせい

七一誠

一年三組の男子生徒。美術部に所属。一見冴えない少年だが、実は、資産家のひとり息子である。自宅の屋敷で萌葱をメイドとして同居していることは、周囲には秘密にしている。

うえはら
上原

一誠が所属する美術部の先輩。彼の気になる存在(?)。

進展するチャンスがあっても、一誠はそのたび明確な答えを避けてきた。先送りしてきた。この土壇場で搾り出せた言葉も、中途半端だ。

萌葱がミニスカートのもう半分も捲り、ガーターベルトの全貌を見せびらかす。

「私はご主人様のメイドですよ？　なのにまだ、ご主人様を満足させて差し上げたことはありません。メイドの私めに……どうか、機会をください」

恋人関係をスタートできなくても、このままでは、主従関係のスタートを押しきられるかもしれない。性的な意味で。

(萌葱のパンツって、あんなに小さくって、薄いのか？)

それほどメイド服の中は誘惑に満ちていた。白くてあられもない太腿も、紫のショーツをちらりと晒すからこそその淫猥さがある。

自信がなさそうに、もじもじと内股を擦り合わせるのも悩ましい。

「それとも……私では、あの、嫌ですか……？」

もう立つてはいられないのか、彼女はベッドに背中を落とすように寝そべり、自ら女体曲線をなぞっていった。太腿に被ったスカートをのけて、ウエストを撫で、恥ずかしそうに巨乳をかき抱く。それでもシートから後頭部を浮かせ、ヘッドドレスを起こす。

「今日こそ、私がメイドになった記念日だからこそ、私を……ご主人様のメイドとして認めて欲しいのです」

しかも小動物が憐情を誘うかのような目つき。こうまで尽くす私を捨てるのですか、と

言いたげな、胸に突き刺さる視線だ。

彼女の言う「今日」とは、ついさっきアルバムで見たばかりの日のことだろう。子ども
の時とは異なる形の契りちぎを求められているのは、読めた。

今日という日を特別意識していなかった自分が、とても薄情に思われる。

「も……萌葱、でもボク」

しかし、まだ心を決められなくても、椅子に座っていても股間が痛い。男性最大の弱点
が勝手に反応し、疼うずくのだ。大好きな彼女の見ている前で、節操なしに欲情してしまう自
身を、罪悪にすら感じてても。

股間を刺激しないよう、一誠はおもむろに起き上がった。彼女を思い留まらせるために
近づくが、目は自然と流麗なボディラインに釘付けに。

「……興味はございませんか？」

興味がないはずがない。むしろ興味津々しんしんであり、悪いとは思いつつながら、ショーツの三角
形を探してしまう。紫色の布は極端に薄く、下着として機能しているのか疑わしい。

総レースなのだから、それなり的高级品のはず。レース模様の隙間に素肌の色が浮かぶ
のが、計算高くも蠱惑的だ。

「こんな風に……はあ、脱ぐんですよ？　ン……！」

ご主人様の正直な興奮ぶりを確認しつつ、有能なメイドがショーツの両サイドに、親指
を差し込む。最初で最後一枚は、ガーターベルトの隙間で折り紙のように剥がれた。

(うわあ……?)

まるで手品だ。ガーターベルトからすると抜き取り、両端を紐で括くくっていたことは脱いでから明かす。少年の視界中央では、乙女の不可侵領域が裸になった。

ショーツに覆われていた部分の肌は、見るからに滑らかだ。

見当たらない女性器を探していると、萌葱が覚悟したように脚を広げる。とはいっても九十度以内の開脚で精一杯。

「もっと、よく……ご覧ください」

いつの間にか一誠は、ベッドの傍で屈かがんでまで、萌葱の股座を見詰めていた。汗のものにしては甘酸っぱいにおいが、鼻先に漂い続け、くらくらする。

股間一帯の性毛は綺麗に剃られており、清潔感があった。剃毛する彼女の構図にピンとは来ないが、日常的にそうしているのだろうか。不埒ふらちな興味ばかり増えてしまう。

「……ココです、ご主人様……」

萌葱の右手中指が、土手の下あたりを押し込んだ。恥じらうトーンの声からも、「ココ」が何なのか、推測は容易たやすい。知識として漠然としか知らないものを発見する。

「ここって……コレ？」

ペニスが入る穴なのだから、筒状の器官を想像していた。しかし彼女が指を総動員してピクアップしたのは、細い縦筋。臍へそが深くなった程度のようにしか見えない。

「あ……あああ！」

それが、彼女の春声とともに形を変えていく。ぱくりと左右に開いて、花一輪が咲くかのように、ピンク色の湿った粘膜ゾーンが現れたのである。鏡で見ることもある口内粘膜の暗がりとは違って、光を吸い込んで輝くみたいな色合いだ。

まず肉唇の花びらがあつて、その内側にもわずかな空間が存在した。そこによろやく穴を見つけたが、驚くほど小さい。

(ちゃんと入るのかな？ そ、そっか……たぶん)

おそらく拡張することでペニスを呑み込むのだろう。具体的に想像するほど、興奮度は増し、目が離せなくなる。

「今宵は極上の……紅茶を、ご主人様に味わっていただき、たく……っんはあ！」

メイドは明らかに無理をされていて、彼女の腰から下は震えてばかり。それでも、愛するご主人様のため趣向を凝らしてくれた。おぼつかない手でティーポットを取り、秘裂の真上で恐る恐る傾けていく。

零れ始めたのは半透明の、上品な金色が美しいロイヤルストレートティーだ。

「メイドであることに、いはあ、ご主人様にお仕えることに、今初めて自信がなくなりそうです……やんつ零れちゃ、あふ、零れてしまいます……！」

こぼこぼと音を立て、肉のカップを潤す。

しかし堪えきれない恥ずかしさで、どうしても手元が狂うらしく、量も多すぎて溢れてしまう。無数の雫が処女の股間を枝分かれに伝い落ち、シートに染みだした。

（萌葱がパンツ脱いで、こんな風に……）

ベッドが汚れることなど気にもならない。少年はまじまじと一部始終を眺め、紅茶の溜まった肉の隙間に、食欲ではないものを込み上^あがらせる。

呑みたい。味わいたい。

「はあ、さ、冷めないうちに……どうぞ？」

萌葱のほうが物乞うまなざしで、薄く開いた唇から呼吸を鳴らす。青柳の眉を八の字に倒して、みつともないくらい涙ぐむ。

（もっもうボク——！）

抑えてなどいられない。頭に熱のまわった少年は、ぱくぱくと宙を何回も噛んで、呑みくだせない量の生唾もろとも舌を垂らした。

「ほんとに、い、ただやくよ？ んもぐつ、はあっんぢゅ！」

問いかけの返事は待たずに、メイドのあられない股座にかぶりつく。零れた紅茶を回収する軌道で、まずは太腿の付け根を、下から上へと舐め上げる。

両手ともミニスカートを掴んで我慢に徹する萌葱の唇から、喘ぎが漏れた。

「ひはあああつ！ そ……そこっ！ そこは……あああ！」

ウエストの捻りで巨乳を転がし、シーツに青い髪を振りまく。数秒としないうちに息を乱し、全身が不規則に跳ねる。ベッドも軋む。

てのひらでさする太腿が汗ばんで、急速に火照り^ほ始めた。張りがあるのに柔らかい、独

特の触り心地が癖になり、少しずつ萌葱の曲線を習得していく。

「ぷはっ、感じてるの？　こう？」

シーツを下敷きにしたお尻にまで手を徘徊させ、体温の上昇を確かめる。最初は遠慮もあつたが、彼女の悶える反応が見たくて、てのひらは次第に剥がせなくなった。スカートに隠れているからこそ、ラインを取り出そうと、躍起な愛撫になつてしまう。

「おしりにっ！　んはあ、ご主人様の手が、ひやつあう」

過去に手を繋いだことくらいなら、いくらでもあつた。夏に薄着で押し合いへし合いしたこともある。しかし今夜のスキンシップは意味が違う。成長した幼馴染の、魅惑の肉体を、猥褻目的で触りまくり、昂^{たかぶ}らせていくのだ。

「だ、だめ……あんっ！　また触っちゃ、んふあう！」

もしかしたら女の子が嫌がることをしているのかもしれない。だが、その後ろめたさと表裏一体の、スリルともいえる背徳感にぞくり。

（ボクすごい、いやらしいことして……!）

触っても、撫でも、まったく飽きが来ない。仰向けの身を振つたり、首の向きを変えたりと、萌葱の反応がいちいち異なつて、毎回ごとに新発見があつた。

お尻の谷間に指を進められるのが、特に怖いようだ。

「ご主人様あ！　おっ、お戯れがすぎます、んはあ……そ、それより、んあ？」

繊細な肌を傷つけないよう、壊れ物を扱う手つきで肌を撫でまわす。触りやすい太腿は

敏感そうに震えつつ、自^{おの}ずとスカートの幅を広げた。

乙女の股座はストレートテイ^ーで濡れそぼっており、におい自体が美味で香ばしい。

「本当に女の子って、はあ、感じるんだね。こんなにエッチな声で」

意地悪なご主人様は囁きながら、改めて顔を接近させた。太腿の熱を頬で感じ取れる接触を経て、舌を這わせ、紅茶の雫を舐め取っていく。

「やん、おっしゃらないで……ひはああん！ あつ、ひあ近い！」

すぐには穴に直行しない。この一帯が、これまでずっと自分のために保たれていたのかと思うと、感慨深くて、急ぐのはもつたない気がしたのである。わざとぴちゃぴちゃと音を立て、深めに吸いつく。

穢れる前の、今夜しか味わえない処女だ。食物を摂取する時よりも舌が、柔軟かつ執拗に動いて、萌葱の甘い味を集める。

喘ぐメイドはベッドの上でのけぞり、ドレスごと巨乳を揺らした。苦悶しながらも、ご主人様のため開脚していよう、という一途な姿勢が、一誠の胸を熱くする。

もっと困らせてみたくなるのは、不謹慎だろうか。

「萌葱、んぷっ、紅茶がなくなっちゃうよ。……お代わりが欲しいな」

シートに零れた紅茶を取り損ねた悔しさもあつて要求する。彼女が断れないとわかっていても、イエスとノーの選択権は与えたい。

「はあ……はい、少々……んふあ、お待ちくださいませ」



そしてイエスと答えさせたい。いつになく弱気な萌葱は、まっすぐ伸ばせるかどうかも危なっかしい右手で、ティーポットを斜めに持ち上げた。今度はもう片方の手で「カップ」をひろ拵げ、少量ずつ注いでいく。

「はああ、どうぞ、心ゆくまで味わってください。それが……私の本望です」

ティーポットを安置したら、巨乳を自ら抱き締めるように構えて、一生懸命な笑みを浮かべる。全身がベッドに乗り上がっているのに、靴を脱ぐ余裕もなかった。

(萌葱が本望なら……)

無理をさせているのは間違いない、だからこそ、気持ちに応えてやりたい。

萌葱の潤んだ瞳が、まぶた瞼を半分伏せる。

「あっ！ あ、ああっそこ……そこ、です……ご主人様の、ための！」

優しいご主人様は、すでに極上の紅茶をすすり始めていた。

メイドの暴れる下半身を、ガーターベルトで捕まえ、急所に舌を挿し込む。口の中へと流れ込んでくる紅茶は、想定外に熱く、咽まで染みだ。

ぢゅるっ！ ずずっず、ずずずずず！

下品な吸い音を立てながら、淫肉のクレパスを舌で泳ぎまわる。どれだけ音を立てても今夜は「特別」、マナー違反ではない。

犬みたいに貪る形になると、唇の両端から紅茶が溢れてしまう。はしたないほど、一誠よりむしろ萌葱が恥ずかしがり、声色を抑制しようとするのがたまらない。

「変な声、出ちゃいそう……やん、そつそんなに、んくふう！」

「んちゅつ、美味しいよ。ぷはあ……萌葱の。すつごく」

ストレートティー本来の渋味に、別の旨味が混ざってきた。だんだんと蜜が粘つく舌に絡みつくようになり、エールよりも確実に深く甘い酔いをもたらす。これは一度知ったら止められない、愛蜜が隠し味のオマ○コティー。

悪戯好きなてのひらは愛撫を再開し、茹で上がった太腿をくすぐりまわす。

「あっあああ!?!」

不意にメイドが嬌声のボリュームを跳ね上げた。唇をわななかせ、肩で息をする。

秘裂の上端の奥まったところには、硬いものが隠れていた。舌で突つくと、メイドの腰が同じ回数のおうち、発作まで起こす。

「ご主人様っ！　そこはだめっ、はあつらめです！　ソコだけは……ッ！」

どうやらクリトリスらしい。粘膜の闇の中でも存在感があり、責めやすい。楽器の弦を弾くと振動とともに美しい音色が出るように、萌葱は全身で打ち震えて、可愛い鳴き声を上げた。ショートシャギーのヘアを左右に乱し、首も使つて悩乱する。

「やっやああああ！　敏感なんです、ご主人様、ッんはああ！」

色香が格段に濃くなり、一誠の脳裏にも誘惑の霧が立ち込めていた。彼女の秘密の穴を貪る以外のことは考えられないし、考えたくない。零した紅茶を吸い上げつつ、尖らせた舌の先端で、粒身を集中攻撃。

萌葱の痺れが病的な痙攣となり、不自然に開脚の幅が広がっていく。

「あくふうっ？ あ……ああっ、きちゃう！ 気持ちいいのきちゃううう！」

彼女の両手がガーターベルトを牽引するものの、華奢な作りの肩からは、ほとんど力が抜けてしまっている。握り拳がぷるぷると震え、指の半分を解く。

少年は夢中で肉穴を舐めしやぶり、濃厚なおいに酩酊しながら、クリトリスの輪郭を舌でなぞった。

「んぶっんうむ、あぐ！ もえひ、おいひいよ、もえぎ！」

汗だくの肉体がみるみる熱化し、萌葱により強い痺れを与える。メイド服のフリルが強風にも煽られるかのように揺れて、中央では巨乳も弾む。

ぬちやぬちやぬちやつ！ ぬちゅ！ ぬちゅぬちゅ！

「ひはっはっはあっ！ んはあっはっはっはっはっ！」

ベッドの上で仰向けの姿勢なのに、マラソンの最中のような症状を起こす。目をきつく瞑ったり、首を振ったりして、何かに抗あがっているのは明らかだ。

まだオマ○コティーを呑み足りなくて、少年は勢いよく残りをすすった。

「んんんんんんんん！」

吸い上げるついでにクリトリスを舌で弾いた瞬間、萌葱の肉体がびくびくと、腰で跳ぶようにのけぞった。ほろ酔い顔の瞳を蕩けさせて、甲高い声で叫ぶ。

「はああん気持ちいいのイクっ！ いいいいイク！ やつらめ、いっせい見ないで、今の

私を見ちゃ、やつらめ、らめええええええええええッ！」

見ないでと言いながら、大胆な開脚のポーズで潮噴きを見せびらかす。

ぷしやあああああああああああ！

突然、視界の全面に蜜が飛び散り、一誠は反射的に顔を離す。萌葱は二回、三回と腰を返し、ラブジュースを噴き散らかした。

それが女性の絶頂だったことを理解するまで、しばらくかかった。

(イク、って……え？ そ、そっか、女の子もイクんだ……?)

まるで電撃に打たれるかのように身悶えて、ベッドにシヨートヘアを押しつける。大人びた相貌には、女の羞恥と、牝の快楽の両方が浮かんでいる。

締まらない唇の端からは、彼女の品格からは考えられない涎よだれも零れた。しかも少年の目の前で、自ら秘裂に右手の中指と薬指を挿し込み、クリトリスを弄り出す。

「んふあはあ……ごしゅじん、さまあ……んふ！ とめられ、な……んあつあく！」

小動物の首元をあやすような手つきで、肉唇をかき分け、弱点を正確に突つく。マットでお尻を弾ませては、柳腰をくねらせ、いかにも心地よさそうだ。

「だめなんです、イってる……もういったのに、まっ、まだ気持ちよく……！」

ぴゅっ、ぴゅっど断続的に噴いていた蜜が、やがて鎮まり、萌葱の体重がメイド服の中に沈んでいく。名残惜しなごりおしそうにも指は外れて、蜜糸を引いた。

真正面で噴水を浴びた一誠の衣服は、滅茶苦茶だ。

「あんなに遠くからは見えないよ。でも、こうやったほうがドキドキするでしょ？」

窓の向こうの遠くでは、クラスの女子が走り幅跳びを競っている。勿論、何かの拍子に女子更衣室のほうを眺める可能性はある。にもかかわらず、透明の窓に萌葱の巨乳を押しつけ、猥褻に耽る罪悪感。

「ボクすつごくドキドキしてる。はあつ、遠藤さんは？ 遠藤さんはどうかな？」

いけないことをしている自覚があるからこそ、鼓動のテンポが速く、それだけ肉棒にも熱い血液が循環した。女子の股間を密封する濃紺色のブルマを、張りあるお尻ごとさすりつつ、縁に指を引っかける。

「んああつ？ ふあ、ドキドキはするけど、エッチな意味じゃなくて、やつ、ブルマはだめ！ 捲っちゃやだ、ブルマは脱がさないで……んくふうう！」

目を血走らせて一誠は、萌葱の隙間からゆっくりと剛直を引き抜いた。代わりにブルマの薄生地へと指を潜り込ませ、肉感的な右の太腿から、境界線を剥がしていく。

谷間への食い込みはより深くなり、萌葱の唇が力なく緩んだ。

「あつはあ、ああらめ、くつ、食い込んじやう」

しどけなくなつた唇から舌を出し、窓ガラスをぴちゃぴちゃと舐める。悩ましいその反応だけでも恐ろしく官能的だ。

「遠藤さんは敏感なんだね。パンツもこんなにどろどろにして……オチンチンしゃぶつて興奮しちゃつたの？」

思った以上の伸縮性があるブルマの下には、ブラジャーと同じ若草色のショーツが隠されていた。柄もなく素朴なデザインは、いかにもセックスとは無縁そうなのに、女の蜜でしとど濡れている。

「はあ、し、知らないわよ。たぶん、汗かいたから」

それでも肉体の発情を潔く認めない、意固地な優等生だが、涎まみれの唇に舌をのたくらせていては、説得力など皆無だ。灼けた吐息は強烈な色香を含んでおり、少年に本能的で根源的な酔いをもたらす。

「汗をかくのは、はあ、今からだよ？ 大丈夫、ブルマでするだけ」

「ブルマだけ？ って、さ、さつきみたいに……はあ、するの？」

追い詰められた萌葱は、妥協に頷いた。

ウエストをくいと捻り、豊大に実ったお尻をおずおずと差し出す。一誠はごくりと生唾を嚥下し、充血しすぎたペニスを構えた。オナニーで握る時とは明らかに違って、異常に熱く、脈拍も読み取れる。

「イクよ？ 遠藤さん……く、くうううう！」

それを太腿の端から、ブルマとショーツの狭間へと押し込む。

痛みにならないぎりぎりの摩擦に迎えられつつ、濡れた二種類の薄布に密封されて、肉砲がびくんとしたうった。

「やだ、ちが！ 一誠、そんなふうにするなんて、聞いてな、やつんふあ！」

股間の真下ではなくて、お尻の谷間をショーツ越しに上へと進むコース。これは予想外だったらしい萌葱が、太腿を擦り合わせて色悶える。

紺色ブルマにはエラ張りの形がくつきりと浮かび上がった。

「あつすごい、ブルマ気持ちいい……ッ！」

ショーツも濡れそぼっているせいで、汁気がいやに絡みつく。谷間に剛直を挟んだ状態で、ブルマにてのひらを這わせると、お尻の曲線がわかりやすかった。

「こんな恥ずかしい……も、もういいでしょ？ 一誠、っあ！」

肩越しに振り向く萌葱は、羞恥のあまり泣きそうだ。もしかしたら単純なセックスよりも卑猥かもしれない、肉棒の使い方に、一誠のほうは過剰に興奮している。

「こうやってると、はあ、エッチの練習みたいだね。く、遠藤さんはどんな感じ？」

「だから恥ずかしくて、それぞれ……ひあつ！ やつらめ、一誠、そこお！」

稚拙ながらにピストンを始めると、萌葱の表情が淫猥に笑み崩れた。力ない眉の下で瞳に艶を秘め、締めりのない唇から、熱い喘ぎを吐き出す。太腿を閉じ合わせた両脚が、お尻を少しだけ降下させ、かりそめの結合を深める。

「はあっ、はあ！ これもオチンチンいいよ、すつごく！ 気持ちいいっ！」

責める一誠も、危なげに息を継いで、ブルマの両端にがしりと掴まった。肉厚の傘が薄生地と擦れて、快感を閃くたび、踵かかとが勝手に浮いてしまう。本来の用途はこうしてペニスを擦ることでは、と思うほど、ブルマへの抜き挿しは心地よい。

肌と同等の温もりに、甘蜜の熱さが混ざってくる。お尻の大きさを薄く引き伸ばされたブルマは、女の股間から充分な液を吸い上げ、強すぎることも弱すぎることもない、ザラめの摩擦を与えてくれた。多すぎる愛蜜が艶やかな太腿をしとど濡らす。

「だっ、だめ……一誠、あたし、いま、オマ○コまでされちゃったら……!」

萌葱の左手が女体曲線をするりと滑り、土手の側から股座を弄り出す。ブルマの股布をもどかしそうに引っかけて、ショーツも一緒に左へと捲り、秘密の穴を開封する。そこに中指を沈めての、オナニニアピール。

「どおにかなっっちゃう、だ、だから一誠、もっもう」

訴えは「もうやめて」とも「もう挿れて」とも解釈できる言いまわしだ。優等生の指先は、ブルマもショーツものけ、狭い入り口をかきほぐす。

切なそうに涙ぐむ瞳は懇願めいていて、少年を奮い立たせた。同級生の「遠藤萌葱」を狩れるなら今しかない。

「……遠藤さん、ユビなんかより、はあ、もっとおっきいの挿れてあげる」

「あ、あたしそんなつもり……やつ、一誠、あたし止められないの!」

こちらの一言一言にやたらと怯え、華奢な肩を竦み上がらせるのがいじらしい。従順なメイドではなく、愛しの同級生を征服した気分と、高揚感だった。

(遠藤さんな萌葱とエッチしちゃうんだ、ボク、遠藤さんと!)

ブルマから引っこ抜いたペニスは、真っ赤に腫れ上がり、ギンギンに血液と欲望を漲ら

せている。それを、死角にある女穴へと近づけていく。

あくまで抵抗の姿勢を貫こうとする、負けず嫌いな幼馴染だが、心配り上手なメイドの指は、怒張を入り口へと案内してくれた。

「ほんとにあたし……ち、違うの、あはしつ、あはああああッ!?!」

裏筋をくすぐられる方向に進むと、淫猥な拡張感と出くわす。

「挿れちゃうよ？ オチンチン……はあ、くつくうう!」

少年は下唇を噛んで、わずかな刺激でも暴発しかねない肉棒を、快楽の柔らかな沼地に沈めていった。覚悟はしていたが、優等生のオマ○コは狭くて、キツキツ。

ぬちゅっ！ ぐちゅ、ずぶ、ずぶずぶずぶ！

「あああ！ あんっ一誠！ いっ挿れちゃや、やだっ、こんなところで、おっオチンチンなんか挿れちゃらめえええええ!」

快楽を打ち込まれる萌葱は、両手でガラスの窓に縋り、甲高い声でしゃくりあげた。角度を決めあぐねる小首がショートヘアを振り乱す。

「やめられないよ！ オマ○コが、はあ、ドロドロで！ ぜんぶ入っちゃいそう!」

暴れる彼女のブルマを引っ掴んで、肉柱をさらに深く埋めていく。観察できない位置にあったも、花弁の濡れ具合は、感触で生々しく知ることができた。

洪水みたいに蜜を滴らせており、すでに雫のいくつかは幹胴を伝って、玉袋にも達している。煮えた性粘膜は、人体の一部とは思えないほど熱い。

(二回目だけど、全然……ま、前よりキツイかも?)

締めつけは処女のものがもつとも強い、というのには、単なるイメージに過ぎないのかもしれない。二回目の結合であるにもかかわらず、肉穴は抵抗が強く、一誠を押し返そうとするせいで、挿入には時間がかかった。

むしろこれが初めての気もある。学院にいる限りは幻想に過ぎないメイドの萌葱と、今ようやく、リアルに繋がっている。

「見つかっちゃうから、んあつ、一誠……お願い、か、カーテン閉めさせて」

男根の入りづらい狭苦しさは、緊張感のせいもありそうだ。彼女の感情がダイレクトに反映されるオマ○コは、随分と怖がりである。

「なら、遠藤さんが閉めていいよ。……ボクは、はあ、こっちで精一杯で」

一誠にとつても、腰が引けてしまいそうなくらいの刺激の嵐だ。筒状の吸いつきが雁首をくだり、幹胴を締めつける。同時にそれを奥へ向かって撫でるヒダヒダは、「出して、出して」とねだるように、敏感な亀頭をくすぐった。

優等生の穴とは思えないいやらしさ。

(だめかも、こんなに気持ちいいと、すぐ、搾り出されちゃいそう!)

ブルマを掴むことだからうじて、本当は弱気なオチンチンを、快樂ゾーンから逃がさずにいられる。

萌葱はカーテンに手を伸ばそうとしたが、届かなかった。

「あくふううん！ うあ？ あああ、おっおくに！」

届かない距離ではない。しかし手足がどれも引き攣ってしまっているらしく、カーテンまであと少しのところ、窓ガラスを無意味に撫でるばかり。

「みんな授業中なのに、っはあ、ボクたちはこっそりエッチだね」

日常の教室での授業中なら気に留めることなどないホイッスルに、びくつとする。窓は閉めきっているはずなのに、無意識の警戒が、最優先で音を拾ってしまふのか。

「言わないで、ほんとに……恥ずかしいから、ひあつ、やん、んむふう！」

開放的すぎるグラウンドと、同じクラスの授業風景を眺める萌葱も、気が気でない様子で締めつけを強くする。この時間、間違いなく学院の中で一番興奮している不謹慎な勃起は、窄まりがちな肉洞をくぐり、竿の全体に粘膜襞をびったりと粘着させた。

急所を刺激され続けているは、優等生を「遠藤さん」と言葉責めしてもいられない。

「っうはあ！ も、萌葱、入ったよ？ ふう」

背の高い幼馴染の背中に寄りかかり、挿入だけで疲労困憊の肉体を休める。

萌葱の巨乳が汗たっぷりに窓ガラスを這い上がった。

「こんなの、おっ、おつきすぎて……はあ、お、オマ○コが拡がつひやう……！」

男の子には狭まって感じられる蜜穴が、彼女には「拡がつて」感じられるらしい。そうさせている極太のペニスが過熱を始める。

「んあっ一誠の、オチンチンがまた熱く、んあ、なつてひてる？」

「わかるの？ はあ、そうだよ、オマ○コの中が、いやらしくって」

肉体のもっとも下品で無節操なところを、このように繋げていては、いかがわしい興奮も誤魔化しようがなかった。愛情ではなく劣情で説明される類の感情が、強迫的に込み上げて、少年の脳裏に後ろめたさを忍ばせる。

そのすべてを、健気なオマ○コは受け入れてくれるのだ。オチンチン専用のお風呂、とばかりに湯を沸かす。

「はあ……オチンチンが溶けちゃいそう」

言葉通り、肉棒の形を溶かされたかのような一体感だ。

「一誠？ あの、出す時は、んあ、お願いだから、な、中には……出さないで？」

幼馴染の懇願に了解してから、一誠は紺色のブルマをしつかりと掴んで、注意深く腰を動かし始めた。直線的なピストンを意識して。

「大丈夫だよ、ちゃんと外で出すから。それまでは、っはあ、こないだみたいに、萌葱のエッチなオマ○コかき混ぜてあげる。……あっあああ！」

まずは外す方向に肉太を引きずり、雁首の赤みが露出しそうなところで、ゆっくりと奥まで戻す。一回の往復に五秒はかけた。

ぬちぬちぬち……ぬちやつ！ ぐちゅぐちゅ……ずちや！

擦ることで形が明確になる勃起に、粘膜襞が一斉にもつれる。

「あはあんッ！ うっ動いへる、いっせいの、あんっ、あはしの中動いてる！」

肉穴を丹念に穿り抜かれて、萌葱は悦がり、いやらしく腰をくねらせた。一誠の意図にないうねりが剛直を奇襲する。

「あつ？ いっ、いまの……いまの、いいッ！」

彼女から肉棒を包み込もうとするような動きだ。性的な欲求が一方通行ではないことを実感し、安心できる。少しずつペースを上げて、粘膜襞の沼をかき混ぜる。

「んくふう、ひあつああらめ！ 擦れへる、おっおお、おくまで！」

悶え狂う同級生は病的な発作を起こしていた。快楽を吐露する唇が、濃厚な色香を空气中に散らす。その吐息にあてられてなのか、頭の中がぼうつとしてくる。

それでも膣の感触は鮮明だった。

（やっぱりオマ○コ気持ちよすぎるよ！ す、すごく！）

優しさと激しさを持ち合わせていて、オチンチンを温かく抱擁しつつ、得意の締めつけで根元から雁首までを苛烈に扱き上げる。エラが張り出た形の亀頭を前後させれば、肉襞の群れがそれを追跡し、執拗なくらいに絡みつく。

肉穴の持ち主は呂律ろりのまわらない調子で、犬みたいに呼吸を刻んでいた。

「あんっあう！ ひはあつ、だめ、一誠……激しい！ ろおにかなっちやうッ！」

ガラスに映ったもうひとりの自分と喘ぎを競う。体操着を捲って巨乳を放り出す大胆な肉体は、見るも汗だくになり、白い光沢を波打たせた。

お尻にきつく食い込むブルマを掴んで、一誠も全身で汗をかく。

「ボクも！ ボクもだよ、ひはっふ、はあっ！ オマ○コ気持ひよくって！」

膣による刺激はペニスにしか与えられないのに、身体中の細胞が沸騰している。自分の肌がブルマのお尻にぶつかる密着感も、萌葱を近くに感じられてたまらなかった。下半身で女体曲線をなぞりつつ、雄々しい肉棒で狭穴を穿り返す。

ずちゅっずちゅ、ぐちゅ！ ずぶずぶ！ ぐちやつ、ぬちゅぐちゃ！

猥音を奏でる穴の中では、摩擦と快感が連鎖していた。先端のむず痒さなど、粘膜襲のぬるぬるとした感触に紛れてしまつて、押ししても引いても心地よい。

幹胴を食い締められる、さらに奥では、肥大な亀頭が快楽電流に焼かれた。

「ひはあっおくまで！ おくまで届いへるの、いっせいの、んふああ！」

Pスポットがだんだん近くなつてくる。奥まった部分に雁太が飛び込むと、膣は一時的に収縮し、ヒダヒダに竿の全体を撫でられた。萌葱が何かを求めるように、窓ガラスを無茶苦茶に舐め、悩乱を極める。

「しびれへるの！ しびれて、溶けちゃう！ っあん！ あっ、んああは！」

「ボクにもわかるよ、っはあ！ 萌葱のお腹に当たつてるんだよね？ オマ○コがきゅつて、ふう、せ、狭くなつて！ ああつまた搾られちゃう！」

肉棒の快感と彼女の反応が病みつきになつて、何回も子宮を狙い打つ。

出入り口をひくひくさせながら、萌葱は垂直のガラス窓に両手で這い蹲つた。明らかに結合部を意識したお尻の、一誠の下半身にぶつかる動きは、おねだりみたいだ。

「んひいあつやおもお！　　いっちゃう、こんなところれ、あつ、あたし、一誠とオマ○コセックスして、あいイク、もおイツひゃうの！」

ソプラノボイスを張り上げて、ショートヘアで首筋をくすぐる。運動場のクラスメートを見ているはずの瞳は、みるみる快樂に蕩けて、涙をたたえていた。

窓の平面でひしゃげる巨乳が、肉体の律動に弾みを持たせる。

ぐちゅずちやつ、ぱんっ！　　ぱんっぱんっぱんっぱんっ！

結合部は蜜の破裂音を立て続けに鳴らし、一誠と萌葱の官能がシンクロした。少年の怒張にも、甘い痺れが蛇のごとく食らいついて、快樂神経をのたうたせる。

「ボクもイク！　　はあッボク、萌葱の、萌葱の中に出したい！」

外に出すなどという器用な真似ができるほど、セックスに慣れてはいない。そこで出すしかなくて、ひりつく亀頭で肉襷ともつれあう。

「んふああふ、一誠！　　だめ……なっ、中はだめ！」

萌葱本人は「だめ」と言いながらも、下の口は熱烈に肉太に吸いついていた。子宮へと向かってうねる膣圧が、強烈な吸引力となり、少年の急所を連れ込む。

「はあはあっ、も、萌える！　　萌葱の感じてるカオも、はあっ、ブルマも！」

情欲そるブルマを握り締め、一誠は腰のペースを跳ね上げた。心臓の暴れる胸を彼女の背中に重ねて、密着感を深め、甘えるような頬擦りも。

肩越しに振り向く萌葱の表情が、溺れるみたいに舌を浮かせる。

「そんなふうには、ひあつ言わないで、あつああ、あたし！ あはしもお！」

甘えられては弱い「お姉さん」は、利かん坊のおチンチンを、濡れ肉の穴で苛烈に食い締めてくれた。灼熱のスープとなった粘膜壁の中を泳ぐうち、勃起の悦痺れは最高潮に達し、予兆が閃く。一番奥へと急いで、幼馴染の包容力を全長で味わう。

「可愛いんだよ！ 萌葱がすぐく、はあはあつ、ボク……あッ！ あつああああ！」

甘美な悦びがぞくぞくと股間に込み上げた。尿道に高熱が近づく。瞬またたく間に形を得た劣情が、細くて長い一本道から次々と放たれていく。

どびゅびゅっ！ びゆるびゆるっびゆるるる！ びくびくっびく！

萌葱と繋がるための勃起が、さながら一本の血管のごとく拍動した。欲望の塊を無遠慮に、野蛮に、生で注ぎ込む。

頭の中に空白が広がり、快感しか感じ取れなくなった。

「あ！ も、萌葱っ！ あっ！ あっ出れる、エッチなお汁れへるよ、んあッ！」

肉棒を蕩かされていくリズムに呼吸が追隨する。

約束違反の中出しに驚く萌葱の、濡れそぼった女穴が緊縮した。

「やああつなからひ！ なかだはれて、いいっイク、ひあんつあたし、なかだしオマ○コレイかはれてるのおおおおおおおお——！」

被虐的な叫びとともに、窓ガラスを間近に見詰めて、柳腰を打ち震わせる。臍のやや下あたりを支点に数回、のけぞり、原液の存在感を確かめているようだ。

「イっちゃへるとこ熱い！ あついのいつせひ、ンあ！ 見ちゃらめええええええええ！」
肉柱で深く栓をしてあるはずの出入り口から、女蜜を散らす。

ぷしゅっ！　ぷしゃああああああああああ！

見てはだめらしいそれは、本当はオシッコなのかもしれない。しかし、その液体が彼女のものなのか、自分のものなのか、一誠にはわからなかつたし、どうでもよかつた。

陶然と舌舐めずりして、味わい深い快楽を反芻する。

「んはあつ、な、なんか漏れてるよ……あ、はあああ……！」

おおまかに「出す」、実際は「注ぐ」、体感的には「漏らす」特異な放精感、膣の中でこそ感じられた。精液とはまったく別の液体が出ているのでは、とさえ思う。

「き……気持ちいいよ、はあ……も、萌葱」

射精が終わったかどうかを感じできない。胴震えがまだありそうで、しばらくは肉棒を埋めておいた。淫猥な抱擁感が名残惜しくもある。

「んふあ、つはあ……はあ、お、おしまい……よね？　一誠。んふああ」

萌葱は肩で息をして、声も少々囁かれていた。腰が抜けたように虚脱し、窓ガラスに両手と巨乳で恥汗を残す。床に突っ伏してからも、お尻を高く突き出すポーズである。

感触が粘液のものに変わった肉穴から、ずるりとペニスが出た。重心を乱された少年は、よろけて、尻餅をついてしまう。

びゅっ、びゅる！



「あっああ！ ま、待って、だめ一誠、ひはっ、く、くすぐりたい！」

耳たぶを裏まで丁寧に舐めて、次は頬のラインへと降りた。

「んちゅむ、あはあ、じゃあエッチなキスにしよう。こつちを向いて。それとも……ボクとキスするの、嫌？」

我ながらずるい問いかけだ。こう責めれば、メイドであれ、同級生であれ、彼女はキスを肯定するしかない。涙めいた瞳を最小に細め、少しずつ小顔の正面を戻す。

「そんなことは、んふあ、ないの。……ない、だけど……ッン!!」

意地悪なご主人様は、答えを確認するより先に唇を塞いだ。萌葱の繊細な唇を上下ともに舐めまわしつつ、キスの隙間から吐息を漏らす。

「あつろお！ いっせひ？ んお、あむあ、んあつおぐ！」

抱き寄せた肩からかくんと力が抜け、抵抗が弱くなっていく。最初は頑なに閉じていた唇も、中途半端に緩んで、喘ぎを分散した。

ファーストキスという響きを台無しにするくらい、乱暴に舌を捻り込み、萌葱に呼吸の喘ぎを強制する。ぷりつとした唇を舐めたくり、歯列の凹凸をなぞりつつ、一誠も息遣いをダイレクトにぶつける。

(キスしてるんだ、ボク、萌葱とキス！)

ずっとキスがしなかった。すでに彼女とはセックスの関係にあるのに、これほど、渴望するほど満たされていなかったのか、と驚く。そして、舌と頭を一緒に蕩かされるような

味わいに感動する。

「待つれ？ むふあ、こんなキス、ダメだから……あおっおぐ！」

自分のものではない唾液の味を泳ぎまわって、幼馴染の意固地な舌に追いつがる。

生温かい口の中で、あやすように、怖がりな萌葱を突つつく。

「あむっ、もえひ、目を、あむっ、ろひ、閉じちゃだめだよ。ずっと見てて」

強引な一誠の接触到押しきられ、萌葱がうねりを返す。

「いつせい、あたし、とけひやう……んふあっは！ ああ、ひあおむ」

ふたりともうつすらと目を開けて、熱いまなざしと、湿った吐息、そして舌のぬめりをリアルタイムで交換した。受け入れてさえくれれば、メイドの舌はとも律儀で素直。

「はあおふ、こ、ろんなキス、されたら、あはひ、と、溶けちゃう……いつせいと、っあく、い、一緒に息するみたいな、あふうむ！」

ご主人様の舌に熱烈に絡まり、積極的に唾液を分けてくる。最初こそ強引に奪う形で始まったが、ファーストキスは自然と引き合うみたいに深くなり、無意識に呼吸よりも優先していた。お互いが腰に腕をまわし、抱擁を熱くする。

(これが、キス……)

想定外にもキスは官能的な旋律を奏でていた。体液ならではの粘音がダイレクトに頭の中で反響し、意欲が一気に高揚する。

ぬちゅっぬちや！ ぬちやり！ ぬちゆくちゅ、ぬちやつ！

下半身の合わせ目よりも、パートナーの意思表示が明確に伝わってくる。こちらのものでなければ、それは彼女の舌と唾液と息遣いだ。

「あっんちゅ、はあおむ、ン！ んもう……つぷはあ！ んあ、はあ、はあ……」

数十秒にも及ぶキスのあと、もつれた舌がようやく解け、口の中に空気が戻ってくる。唾液の分泌量が夥しいのに、咽は渴いている、ちぐはぐな余韻が新鮮だった。

「キス……しちゃったね」

男の子もキスを神聖に思うことはある。古くさい言い方をするなら「愛を確かめ合う」のにもっともロマンティックな触れ方だろう。

「オマ○コにはいっぱいキスしてるけど。はあ、萌葱もフェラチオしてるから、おあいこだね。萌葱……恥ずかしい？」

わざと羞恥心を煽る言いまわしにして、清純な顔が赤らむ、初心な反応を楽しむ。

「やつやだ、エッチ。フェ……お、おしゃぶりは別よ。キスはキスとして……んっ、んむふう、こんなふうに、あはあ、触れあうの」

言葉半ばに、彼女の舌が唾液の糸を辿ってきた。今度は静かに唇を重ねて、どちらとも自然と臉を閉ざす。たった数秒が永遠にも感じられる。

ご主人様は涎たっぷりに唇の合わせ目をずらし、萌葱の頬を舌で這い上がった。

「あふっ、萌葱、オマ○コエッチの続きしよ？ もっ、もおボク」

もう我慢などできないし、したくもない。フリル仕立てのエプロンの向こう側にある幼

馴染の、湯濡れのスクール水着を撫で下ろし、お尻をしつかりと掴む。

「持ち上げるよ、萌葱！」

少年は後ろに背中を落下させ、仰向けとなった身体の上に、メイド美女のあられもない開脚部位を運び込んだ。怒張がPスポットを乱暴にかちあげてしまつて、ほぼ垂直に起こされた萌葱が、巨乳を弾ませつつ、湿った唇をわななかせる。

吐息めいた声のトーンがいやに高い。

「一誠っ？ やつらめ！ ひはっおお、おくに！ おくまできちやつてる！」

心もとない細腕を、反射的に一誠の胸元へと突っ張らせるものの、不安定だ。結合部を強調するM字開脚となり、ベッドを踏み締めることで、どうにか転倒せずに済む。

（す、すごい眺め……！）

思いつきの騎乗位はエロティシズムに満ちあふれていた。羞恥と快楽をない交ぜにした女の子の、涙ぐましい表情。上腕とフリルに挟み込まれた、たわわな巨乳。

そして、エプロンの裾の下でスクール水着に白濁を湧き立たせる、出入り口。

「はあああ……い、一誠って、くふう、こんなに力持ちだったの？」

どうしても挑発的になつてしまふ開脚の、太腿のむっちり感まで、萌葱のすべてを一望にすることができ。そのうえ、直接的な刺激も凄まじかった。

「萌葱のこと抱くなら、はあ、これくらい、ね……くうっ！」

雄々しい勃起は、彼女の臍の近くまで届いているはずだ。体重も存分に加わり、肉穴の

締めつけの苛烈さに、たまらず一誠は奥歯を噛み合わせる。過熱する全身に玉の汗を浮かべて、苦悶の息を継ぐ。

「こんな時だけ男の子らしくなっちゃ、やつずるい、い、いつせええ！」

「萌葱もっ、んあぁ、女の子らしく、エッチな声になっちゃってるね」

それでも優しいご主人様は、メイドのお尻を宥めるように撫でていた。しつとりとしたスクール水着のラインを辿れば、自然と萌葱のプロポーションを堪能できる。

「い、一誠？　はぁ、優しかったり、激しかったり、しないで……あつあたし、どっちでいれればいいのか、わ、わかなくなっちゃうからぁ！」

「どっちも萌葱だよ。安心して……落ち着いて、ボクのおチンチン、感じて？」

彼女の言う「どっち」が何の二択なのか、考えるまでもなく直感できた。

萌葱にとつては、メイドとしてご主人様を世話するつもりだった夜なのだろう。しかしキスのせいも、年上の同級生としての気分が高揚してしまっている。

「でっでも、んはぁ、やつぱり、つはぁ、メイドでなくっちゃ、恥ずかしいの……」

メイドの際の、献身的な積極性が弱い。それでも、幼馴染の彼女に頑張ってもらって、能動的に腰を使ってくれないことには、始まらなかつた。

意地悪な騎乗位。

「恥ずかしがつてよ、ボクのために。ほら早く、はぁ、萌葱が動いて。ボクは、これじゃ突いてあげられそうに、はあつ、ないし」

少年に乳果を掴み取られる気配を察知したのか、萌葱が迂闊に腰を浮かせる。

「待って！ あたしまだ、心のじゅん、び……やああああッ！」

エラ張りの肉棒が蜜穴を穿り始めた。最大の太さと最小の狭さが、摩擦力を高め、一誠と萌葱の境界線を熱く溶かす。

「うああ萌葱？ はあ！ オマ○コが、うっ動いてるよ！ んはあ！」

肉のような、汁のような粘膜が、勃起の位置に追いつてくる。竿の全体を抱擁するヒダヒダが、亀頭冠の角でうねり、絡みつく感触も心地よい。

大腿で乗っかる萌葱は、呂律のまわらない鳴き声を上げ、肉悦に悩乱していた。

「あつああ、ち、違うの！ あはし、あたしこんな、んあつあふ、らめつ、一誠！ オマ○コが、やあん、びりびり！ びりびりつれしへるの！」

ピストンの折り返しごとに痺れが強くなり、剥き出しの快楽神経がひりつく。一誠の剛直を、萌葱の濡らした肉褌が、蜜を織り交ぜつつ滑り降り、すぐに這い上がる。

ルームランプの光が届かないところは、夜の静寂に満ちているのに、ピンク色のベッドの上だけは、荒々しい息遣いと淫水音で騒がしかった。

ぬちゅぐちゃ！ ぬちやつ、ぐちゃ！ ぐちやぐちゅぐちゃ！

「ひはあ！ あふつとめたひ、のに……とまんない、これ、一誠！ とめらんないの、ろめたら、おおつろ、どおにかなつちやう！」

巨乳の真下の結合部を見下ろし、萌葱は強すぎる官能を拒絶しがっている。切れ長の

瞳に、らしくもない涙を溜め、しきりに小鼻もすする。

しかし火照りすぎた肉体は、じつとしてなどいられない有様で、細腰を一心不乱に突き動かしていた。最初こそ上下だった律動に、前後の傾きがかかり、侵入者の特徴的な角度を、よりスムーズに咀嚼する。

「あつ！　じ、上手だよ、萌葱！　もつとゴシゴシって、っはあ！　はあはあ！」

こちらにとつても、暴発させずにいられるのが不思議なくらいだ。膣圧の大波をくぐるたび、茎膈は扱かれるし、亀頭は粘膜襞にしゃぶりつかれる。

しかも、騎乗位のためか子宮が近く、Pスポットと激突しやすい。そこを打たれると萌葱が反射的に腰を震わせ、背筋を伸びきらせた。

「おおおく！　おくにすぎく、ひはあつ当たっひやう！　あつやだ、らめええ！」

その瞬間に限って肉環が、奥に向かって収縮し、オチンチンを連れ込む。怒張が子宮にキスを与えるまで、逃げられない。

「もつと！　もつとボクの感じて、はあつ！　萌葱！　んく、感じまくって！」

止まっているわけでもないのに先端が無性にむず痒く、一誠からも腰を跳ね上げた。萌葱の身体が浮いてしまいそうなのを、スクール水着を引っ掴んで押さえる。

「やあん！　あんっ激しい！　一誠だめ、あつあたし、あはあん！　オマ○コ擦れれ、痺れて、んはあつ、気持ちよすぎて、すごいの！　あつああ！」

必死に悶える萌葱の表情は、乙女の羞恥を忍ばせながらも、牝に生まれた悦びに蕩けて

いた。唾液を断続的に垂らす、締まりのない唇に舌舐めずりして、色めく。

「恥ずかしいのに、いいいの！ 気持ちいいのお！」

腰で暴れるうち、規格外の巨乳も揺れまくり、スクール水着の肩紐がエプロンのフリルごとずれてしまう。解放された肉釣り鐘は、左右に幅を取るように弾み、ミルク色の肌を恥汗で照り返らせた。

（萌葱がすごいエッチな声で、感じて！）

甘酸っぱい香りが一段と濃くなり、呼吸器官からも酔いがまわる。喘ぐ萌葱の色香に誘われて、手を這わせずにいられない。

「もっ揉んじゃだめ！ やんっ、び、敏感だから！ あくふっ、んあう！」

豊大な曲線に指がむにゅと沈み込む。風呂あがりの乳果実は汗で蒸れており、少年のてのひらにべとついた。マシユマロみたいな柔らかさの先端では、桜色の突起が明らかにしこり、宙に小円を描いている。

そこを指で弾くと、膣の中でもぴくつと肉襞の蠢く反応があった。間接的に勃起を刺激できる方法に病みつきになり、五回も六回も繰り返す。

「オッパイもきちゃう！ ひはっう、んあふ！ くっ、くりくりしちややああ」

催促みたいに囁くので、両方の先端を「くりくり」と弄りまわす。擦ったり摘まれたりした瞬間の、眉の弛緩が悩ましい。

萌葱は清楚可憐な唇を台無しに開いて、裸乳の谷間に動物性の涎を滴らせた。汗みずく

の白い肌を、ほの赤く染め、発作的に昂っていく。

潤みきつた瞳はうっとり少年の裸に見惚れ、牝の悦びをたたえていた。

「あああああ……！ ああふ、いつせえ！ あたしっ、感じすぎて、もお！ カラダが勝手に、ひあっ、う、動いちゃうの！」

身体が勝手に動くの、など言い訳にしか聞こえない。想いと快感をぶつけあうセックスの味わい深さに、彼女も陶然として、浅ましい穴の快楽に乱れている。

スクール水着の紺色と一体の肉体が、ひっきりなしに腰を躍らせる。捲れたエプロンが咲かせたフリルの、大輪の花の中で、発情期の穴は摩擦を急いだ。

じゅぷっじゅく、じゅぷ！ じゃぶっじゃぶ、じゅぶ！

「気持ちいいの！ 一誠、あつあたし、ひはあん！ まっあは、擦られる！」

愛蜜を無限に溢れさせる欲張りなオマ○コが、狭いなりに懸命に、オチンチンの太さと長さを丸呑みにする。一誠を愛しそうに、大事そうに食い締めてくれる。

「ボクも！ 気持ちいいよ、萌葱！ んはあつはあはあ、はあ！」

粘膜襲の荒波を泳ぐ肉棒がのたうち、芯から痺れついた。臨界が近いからこそまだまだ萌葱を感じ足りなくて、ふくよかな裸乳を押し揉む。

「ひはああ！ んああ、くっ、くすぐりたい、一誠……はあっああお！」

それからスクール水着の薄生地越しに、背中からお尻までのラインを撫でまわす。柳腰の波打つ角度は九十度近かった。



最後は華奢な細腕を、まどろっこしく下へとさすり、手を繋ぐ。

安心したように萌葱は、指をしつかり編み合わせて、腰を存分にスイングさせた。二枚の肉唇で茎胴の全長をしゃぶりつつ、元気な亀頭に悦痺れをばらまく。

「いっせいもつと！ もつとちよおだい、一誠の！ 一誠のぜんぶ、あんっ欲しい！ 一誠のオチンチンも、せえれきも、あはし、あたしに！」

怒張が奥まで届くと膣全体が収縮し、一誠を切に求めてくる。

「あげるよ！ だからボクもつ、はあ！ 萌葱のこと、ぜっぜんぶ欲しい！」
一誠も肉棒を硬く興奮させて、萌葱を求めた。

ぐちゃっぐちゅぐちやっ、ぬちゅぐちや！ ぬちやっぐちゅつぬちや！

夜の闇から切り取られたベッドの上には、自分を愛してくれるパートナーがいて、同じ快楽に悦がっている。その実感をてのひらで温めながら、肉欲のダンスに溺れる。

「はっ、はあ、も、萌葱……っはあ！」

彼女の顔つきは、ひとつ年上の幼馴染が成長したもの。紺色のスクール水着は同級生のもの。そして、優美なヘッドドレスと純白のエプロンはメイドのもの。

萌葱のすべてがすでに自分のモノなのに、胸を激しく焦がされた。

「萌葱がボクの、はあつ、ボクのメイドでよかった！ よかったよ、萌葱！」
実直なメイドが発作的な喘ぎを浴びせてくる。

「あたしも！ あはしもよ、ひあっあふ、一誠！ ご主人様がいっせいで、あん！ ほん

とおによかったつれ、おっおお、思うの！ あっあひああ！」

ご主人様にバランスを取ってもらえるのをいいことに、これみよがしに、それも上手に腰をくねらせ、悶え狂う。大胆なM字開脚はスクワットじみた瞬発力を伴っていた。

萌葱のオマ○コには、一誠のオチンチンが出たり、入ったり。

男の子の一部が女の子の穴へと飛び込んでいく光景は、ふたりの間で丸見えだ。嵌まる際は痛々しいくらい深く、外れかかる際には、花弁のピンク色が、両脇から肉唇がまろび出るほど捲れてしまう。こちらの股間一帯まで、メイドの発情汁でぐちゃぐちゃ。

「いっせひ、あふっ、あたひの、ご、ご主人様あ！」

肉体の快楽に翻弄されて涙ぐむ、清純な小顔にも男心をそそられた。

胸と股間に熱い感情が込み上げてくる。

「も……萌葱、萌える！ 今夜の萌葱、はあっ、す、すごく萌える！ はあはあっ！」

催してしまった「萌え」は、強迫的な焦燥感を駆り立てた。もっと粘膜を激しく擦れ合わせたくなくて、萌葱の腰が中央に戻ってくるところを、狙って突き上げる。

加減も遠慮もしない。彼女の子宮に興奮とキスを押しつける。

「あああああッ！ ご主人様は動いちゃ、やつらめええ、もおっ、もうあたし！」

ご主人様直々の打ち上げの一回ごとに悶えるメイドが、いじらしい。

愛蜜の泡が次々と弾けた。

ぱんっぱんっ！ ぱんっ！ ぱんっぱんっぱんっぱんっ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で
好評
発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!

女幹部メル様のセカイ征服計画!

【小説：高岡智空 / 挿絵：鈴眼依鐘】



全国書店で
好評
発売中

「…藤田君は責任取るべき」
陸月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

【小説：さかき傘 / 挿絵：天海雪凷】



宇宙海賊学園ブラックキャット

【小説：Kypnosus / 挿絵：ごまちゃん】

全国書店で
好評
発売中

生徒会長の裏の顔は宇宙海賊!
海賊少女の痴態が宇宙を駆ける!?

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獣字艶戦姫ノブナガリ ①～③
- 坂田唯らい樹【カースイーター】
- 魔海少女ルルイエレル

- 借金お嬢クリス ①～③
- 無敵の姫騎士がDMMに目覚めたようです
- BLANGEL 輪になりに語る愚者の夜

- ビルグリムメイドン ①～②
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです
- 殉魔!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせはこころみください。お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!